

迷いながら、一歩ずつ。

～スチューベンと歩んだ3年間と、感謝の門出～

卒隊メッセージ（筆：葛西 忍・あゆみ）

葛西夫婦は2023年より、スチューベン農家への就農を目的として、地域おこし協力隊に着任され、3月で卒隊となりました。そこで、葛西夫婦からのメッセージを掲載します。

1年目：なれない作業に苦戦する日々

農業の現場では自分たちの非力さを痛感する毎日。農作業機に乗っても、機械を自在に操る自信が全く持てず、師匠に言われるままついていくのが精一杯でした。それでも、皆さんの優しさやスチューベンの驚くような甘さに触れ、「今は未熟でも、いつかこの町で、この人たちと一緒に生きていける農家になりたい」と強く決意しました。



2年目：試行錯誤の園地管理と6次化商品

園地をお借りして実践的な研修が始まりました。待っていたのは厳しい自然の洗礼でした。記録的な大雪で腰まで埋まる雪をかき分け、寒さに震えながら畑へ向かう日々。農業の厳しさを改めて肌で感じました。

また、機械への不安は、手作業の積み重ねと「自分たちにできる新しい挑戦」で埋めました。その一つが、スチューベンの魅力をより多くの人に届けるための「6次化商品」の開発です。一年中楽しんでもらえるようにと、濃厚なジュースや、手軽に味わえるキャンディ、様々な料理に活用できるパウダーの試作を重ねました。「どうすればこの甘さを活かせるか」と悩み、試行錯誤した時間は、私たちにとってスチューベンの新たな可能性を確信する大切なステップとなりました。雪の下で春を待つ木々のように、地道な準備を積み重ねることで、少しずつ「農家としての覚悟」が芽生えてきた時期でした。



3年目：独立の準備と地域資源を活用した商品開発



独立を見据えた実践的な研修に明け暮れました。やればやるほど農業の奥深さを知り、「これでいいのだろうか」と迷い、自分たちの技術に自信が持てず、立ち止まりそうになることもありました。葛藤の中、大きな転機となったのは、東京でのPR活動です。都会の方々が私たちのスチューベンを食べて「こんなに甘いけど、初めて！」と目を輝かせて喜んでくれる姿や笑顔を見たとき、「鶴田町のこの味を、守り、伝えていくのが自分の役割なんだ」と強い光が差しました。

栽培の難しさに悩みながらも、より多くの方に届けるために、小瓶やパウチ入りのジュースといった商品開発にも挑戦しました。また、新たな可能性を信じて挑戦したのが「雪室（ゆきむろ）スチューベン」です。きっかけは、協力隊として「雪室りんご」の作業をお手伝いしたこと。雪の力で美味しさを引き出す先人の知恵を目の当たりにし、「これをスチューベンにも活かさないだろうか」と、大きなヒントをいただいたのです。地域の先輩から教わったこの視点が、私たちに新しい勇気を与えてくれました。

4年目～：葛西夫婦のこれから

4月からは農家としての「準備期間」に入ります。私たちが大切にしたいのは「三方良しの精神」です。美味しいスチューベンを育てることで、食べる方が喜び、地域が活気づき、自身も成長していける。そんな調和のとれた農業を、この町で実現したいと考えています。私たちはこの町の小さな「端役」であっても構いません。先人たちが築いた日本一の産地を守り、未来へ繋いでいく一員になりたい。そう決心しています。

まだまだ未熟な私たちですが、これからも温かく見守っていただければ幸いです。3年間、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願ひいたします。

